



〈もしもわが子が…〉

大企業社員の闘い

ジャーナリスト
松本 侑壬子

公害は人間の作り出す災害だ。日本は水俣病、イタイイタイ病、四日市ぜんそくなど世界に知られる公害問題を経験し、今、原発による放射能という深刻

な脅威にさらされている。問題は第三世界にも広がっている。本作は、二十年前に起こり、今なお続く実在の事件の映画化である。

一九九四年、パキスタン。新婚のアヤンは国産製薬会社のセールスマンだが、会社は巨大な多国籍企業に押されて倒産寸前だ。父親も失職で政府を相手に裁判闘争中で、一家の生計を一身に背負っている。妻のザイナブが見つけた巨大グローバル企業の営業職の募集に応募、屈辱的な虎の吠え声の真似をさせられたり、罨の質問に無理に答えさせられたりの挙句、難関を突破して採用される。配属先は会社のブランド製品「世界最高の粉ミルク」を売る営業部だ。前職の経験・人脈と誠心誠意の仕事ぶり

でたちまち顧客の病院や医師からの信頼を得て、やがてトップ・セールスマンに。新しい家も買いい、子どもも生まれ、生活は安定した。

だが、一九九七年、親しい医師に小児病棟で何本ものチューブにつながれた骨と皮の乳幼児らの悲惨な姿を見せられる。それが自分の売ったミルクのせいだ、と告げられ大ショック。貧しい母親らはミルクを溶かすのに不衛生な水やミルク瓶を使っているためだ。しかも、彼女らは外国製ミルクは栄養価が高く、子どもの頭がよくなると信じ、高いミルクを薄めて飲ませているという。

自分自身も父親としてアヤンは「すぐに販売を止めねば」と上司に訴えるが、驚いたことに、会社はそのことを既に承知の上でミルクを販売し続けていたのだ。会社を辞め、販売中止を求めて訴えるというアヤンに、上司はアヤンが在職中に医師や看護師に営業用の「粗品」や

金をばらまいたことを契約違反だと脅す。だが、それは上司自身の指示でやったことなのだ。騒ぎが明るみに出るとつれ、人権団体、海外マスコミも動き出す。上司は、このまま告発を続けると家族の命の保証もないと脅したり、逆に、失職で生活も苦しくなったアヤンに莫大な和解金の額を示す。一瞬心が揺れるアヤン。だが、病棟の子らの映像を見たザイナブは「信念に背くような夫は尊敬できない」と励ます。アヤンは妻子を守るため父親の故郷に避難させるが…。

巨大なグローバル企業相手に内部告発をするとは、どういうことか。誰とどう闘うべきか、経験も知識もない孤無人権団体にもマスコミにも、それぞれの判断も事情もあり、一緒になって闘ってくれるというものでもない。だが、アヤンは知ってしまった、自分の売ったミルクがこの悲劇を引き起こしているという事実を。ただ子どもを救いたい、こんな製品は売るべきでない、という良心の声に突き動かされて、無謀でも突き進むしかないのだ。

アヤンの孤独な奮闘劇は、国を超えて人間の生き方として深い感動を呼ぶ。それは企業の社会的責任への問いかけに直結している。

『汚れたミルク／あるセールスマンの告発』

インド・フランス・イギリス合作映画 (94分)

監督：ダニス・タノヴィッチ

出演：イムラン・ハシュミ、ギータンジャリ、アディル・フセインほか

3月4日より新宿シネマカリテほか全国順次公開

© Cinemorphic, Sikhya Entertainment & ASAP Films 2014

